あなたにいてほしい

マタイ13:24～30&36～43 / 笠原光見

先週、礼拝が終わって午後牧師室で仕事をしていると教会の壁にテニスボールを打ち込んで練習しているおじさんが居たんです。前にも一回やめてくださいとお願いしたんですが、また教会の壁にテニスボールをぶつけていたので窓を開けて「すみません。ボールを教会の壁にぶつけるのやめてもらえますか」と、やわらかく言ったのですが、「壁に当ててねぇよ」みたいなことを言い返してきたんです。逆ギレですね。それに僕も頭に血が上って表に出て行って少し言い合いになりました。最終的には納得して帰ってもらったんですが、後味が悪くて、冷静になってからは、近所の人と牧師が外で言いあっているなんて良くないよなぁ、こんど顔を合せるときには気まずいなぁ、違う言葉遣いも合ったのではないかなぁ、とかいろいろ考えました。とりあえず神さまにごめんなさいと謝りましたが、モヤモヤとした気持ちはなかなか晴れないものです。

僕は、欠けも、破れも、多くあって、立派でも敬虔でもない。そんな自分が神さまの憐れみと、愛と、ゆるしによって生かされ、教会の家族であるみなさんの輪の中置かれ、用いられ、ここに立たされているんだということ改めて感じている今日この頃です。そんなことを思いながら今日の福音書の箇所を読むと神さまからの福音が心に沁みるんです。

イエスさまは、「毒麦のたとえ」話をされるんですが、どうして毒麦のたとえ話がされているのかというと、当時のユダヤ社会で神の名を使って、またはモーセの名を使って、人に対して差別や選別がされていたということがあったからです。

ユダヤ人は、神から選ばれた民だという選民思想、選民意識を強く持っている民族でしたから、ユダヤ人以外の異邦人は毒麦だ、というような選別・差別が生まれ、神の祝福の輪から人々を追い出してしまうことになっていたんです。

さらには、神からの救いに与るための厳しい条件が付け加えられていき、条件をクリアできない者に対する差別・選別も厳しいものとなり、できない者には汚れているとか、罪人だ、というレッテルが貼られ、神の祝福を受ける共同体の輪から追い出すようになったのです。

異邦人と付き合う人もダメ。律法や掟を守らない者もダメ。出血の病の者も、重い皮膚病の者も汚れているからダメ。

イエスさまはこうした差別・選別・排除が当然のようになされている社会と人々の心に「否」を突きつけるんです。そして、神さまの私たち一人一人に向けられている深い憐れみ、限りない無償の愛、ゆるしの福音を、ご自身のいのちをかけて、全身全霊をもってあらわし、伝え、知らせ、届けました。

神の名を使って人の心から希望を奪うことがあってはならない。神の名を使って人を惨めな生活に追いやるようなことがあってはならない。

聖書はいいます「神は愛なんだ」と。神は思いを込めて、心を込めて、愛を込めてあなたという唯一無二のかけがえのないいのちの存在をこの世界に誕生させました。だから、あなたがここに居ることは奇跡だし、本当に素晴らしいこと。あなたは神さまの祝福、恵、愛を受けるに相応しい存在。だから主イエスはすべての人に福音を知らせ、限りない愛を持って受け止めていきます。

イエスさまの傍に居た人々は実に様々でした。徴税人のマタイのように、外国人と関わりを持たなければいけないことでユダヤの人々から汚れていると蔑まれる人がいた。姦淫の罪で人々から石を投げつけられそうになった女の人もいた。人々から汚れているといわれた重い病に苦しむ人も、体の不自由な人も、悪霊に取り憑かれているといわれた人もいた。娼婦と呼ばれている人もいた。大酒飲みの人もいたようです。

彼ら、彼女らは主イエスと出会い、主エスに受け止められ、主イエスが伝える神さまの福音、祝福、愛を受けて、生きる力、勇気、希望の光を汲み取っていきました。

毒麦のたとえは、イエスさまの周りに形作られてきた愛とゆるしの共同体が、これまでの社会常識による選別基準で、人を差別・選別・排除するようなことがあってはならいことの呼びかけです。人の心に染みついた社会常識から抜け出すことはとても難しいことです。完璧な人間は一人もいないわけですから、何かことあるごとに、自分たちの心に染みついている社会常識や選別基準が幅をきかせて、仲間を毒麦と判断して裁いてしまう、神さまの祝福の輪から閉め出してしまう恐れがじゅうぶんにあります。

良い麦を守るために、毒麦を「行って抜き集めておきましょうか」と言った、たとえ話の僕の言葉は、人として自然な反応かもしれません。ただ、選別されるのは麦だということで、たとえ誤った選別をしたところで、たいしたことじゃない、かも知れません。しかし、それが人を対象とした選別となれば大事です。神さまとの繋がりを求めている人、神さまの支えを必要としている人を、この世の評価基準、選別基準で、神さまの恵の外に追い出すことは、あってはならない。そのことを神さまは主イエス・キリストを通して私たちに伝えるんです。

神さまは、私たちが生きている限り、いつでも悔い改める可能性があることを信じて、優しいまなざしを向け続け、福音のみことばを呼びかけ続け、共に生きていく者であるように招き続けてくださっています。

イエスさまは、人間的な評価基準、選別基準で人を差別・選別・排除することがないように訴えました。ただ、世の終わりには選別があるのだということもはっきりと言っています。これは軽く扱うことのできない、重い言葉として響いてきます。

「選別があるのなら、その選別基準は何ですか」、という問が生まれるのが当然だと思います。その基準として神さまが立てたのが、修行を積むこと、献金を積むこと、掟を守ること、倫理的・道徳的に立派に生きなければならない、ということではありませんでした。

神さまの「選別基準」それは、神さまが、すべての人の罪のゆるしと、永遠の滅びからの救いのために差し出してくださった御子イエス・キリストを信じて、受け入れ、感謝を持って、賛美をもって生きることです。

神さまは、神さまが思いを込めて、愛を込めていのちある存在としてこの世に誕生させたあなたというかけがえのないいのちの存在と共に生きていくことを心から望んでいます。だから御子イエス・キリストのいのちを与え、福音のみ言葉を与え、あなたのいのちを励まし、一度きりの人生を後押しし、応援したい、祝福したい。

神さまは、あなたにいてほしい。あなたと共にずっと、ずっと生きていきたいんです。

私たちは、「あなたにいてほしい」という私たちに向けられ続けている神さまのあったかいまなざし、あったかい福音のみことば、あったかい愛を、いつでも思い起こしながら、キリストのあったかな愛の輪を大切にして、広げていく、伝えていく、知らせていく者でありたい。

「あなたにいてほしい」という神さまのやさしいまなざし、おもいやりのみことば、あったかい愛の輪を、繋げていく、広げていくキリストの教会でありたいと思うのです。